

これまでに聞いたことのない、すさまじい轟音が耳をつんざいた。金属を引き裂くような、巨大なコウモリの絶叫のような、全身の骨を震わせる轟音。

蛇の息——これが、魔力を秘めた伝説の蛇の息なのだ、とぼんやりと思った。

まるで、千もの嵐が火口内で荒れ狂っているかのようなようだった。眼を開きたい欲望を必死に抑え、トレアンダとその姉を抱きしめる腕に力を込めた。

暴風が私の周囲で渦を巻き、息ができないくらいだった。岩やその他のあらゆるものが吹き飛ばされ、転がり、ぶつかり合う音がした。

いつまでそうしていただろう——「声」がなかったら、おそらくずっと同じ姿勢のまま、動かなかつたに違いない。

「もうよい。眼を開くのだ。〈灰色の右手〉よ」

私はゆつくりと眼を開き、上体を起こした。まず最初に気づいたのは、おかしなことに、すでに雨がやんでいる、ということだった。頭上からは、陽光が差し込んでいる。

リヴァーシが、じつと私を見つめていた。つややかだった鱗は、すすけ、ひびが入っていた。その眼は、いつの間にか灰色に濁っていた。

「リヴァーシ……あなたは……」

「わたしは二千年間、眠り続けてきた。その二千年分を、一度に歳老いてしまった……」

私はまず、足元のトレアンダとその姉を揺すった。

先に目覚めたのは、トレアンダの姉だった。

彼女は、きよとん、とした表情で、周りを見回した。そして、怯えた様子もなく、私を見上げ、続いて弟の姿に気づいた。

「トレアンダ？　トレアンダなんでしょ？　ここは……レーストなの？」

トレアンダも目覚め、次の瞬間に顔いっぱいには笑みが膨らんだ。

「姉ちゃん！　よかった！　眼が覚めたんだね！　探したんだよ！　ずっと探してたんだよ！　ヒジの鷲に乗って、水晶山までやって来たんだ！」

「ヒジの鷲？」

トレアンダは泣き出し、姉の胸に飛び込んだ。姉はただ、自分の身にも周囲にも何が起こったのか理解していない様子で、泣きじやくる弟を抱きしめていた。

「ゴルカン……」

振り返った。

土埃にまみれたドウイータが、よろめきながら立ち上がった。

「よかった……！ 生きていたのね」

「きみこそ……よく、私の言うことに従ってくれた。ワドワクスは？」

私が言うと、ちょうどワドワクスが立ち上がるころだった。

「ドウイータ！」

彼は叫び、ドウイータに駆け寄ると、その体を抱きしめた。

「ほかの連中たちは……？」

ワドワクスが回りを見回した。そのときになつて、ようやく私にも火口——かつて火口であった廃墟を見回す余裕が生まれた。

大小の岩が転がり、土煙でいまだに煙っている。そこに、暗灰色の岩の塊が無数に立っていた。その数は百以上あるだろう。岩壁から落ちてきたものではない。縦長の岩が、まるで地面から生えている不気味な茸のように立っていた。

私は、その一つに歩み寄った。そして、息を呑んだ。

それは、かつてはマトスと呼ばれていた人の成れの果てだった。リヴァーシの息は、人を岩と化す力があつたのだ。

と、そのとき、地鳴りがした。足元が揺れ始めた。

「〈灰色の右手〉よ、感謝する。そして、謝罪する。わたしが殺した七人の乙女の命は、いかなる神の力をもつてしても、戻らぬ」

「リヴァーシ……」

「それに、そなたがたを救うだけの力が、もう残っておらぬ。わたしの勝手を許せ」
リヴァーシは、その翼を開いた。その巨大さに、改めて驚きを感じた。端から端まで、ゆうに二イコル(約六十メートル)はあるだろう。現実のものとは思えなかった。

「レグドランまでの旅が、どうかご無事でありますように」

「七十七匹の大蛇を代表して、今ここに誓おう。一旦、この地に災い降りかかることあらば、我々七十七匹が、必ずや救いに参る、と。それが、わたしの、償いだ」

リヴァーシは羽ばたきを始めた。土埃が舞い上がった。そして、頭上の開口部から、

身をくねらせて外に飛び出した。リヴァーシは、我々の上で一回りすると、北に向かって飛び去って行った。すぐに開口部からはその姿は見えなくなってしまうた。

「まるで……夢を見ているようだ……」

ワドワクスが一人ごちた。

「では、すぐに、目覚めなければな」

足元の揺れが徐々に激しくなっていた。水晶山全体が、揺らいでいる。天蓋から、崩れた岩が落ちてきた。

「じきに、ここは崩壊しますよ。いったいどこへ逃げれば……」

ワドワクスが周囲を見回した。

私は、胸に手をやった——なくしてはいない。

龍の左手の指の骨で作られた呼び子——もう一度、助けを借りなければならぬ。

私は、呼び子を吹いた。

水晶湖を渡るときと同様、何の音も耳に聞こえなかった。

「それは、何なの……」

ドウイータが訊こうとしたときだった。

二十まで数える間もなかった。羽ばたきの音——見上げた。太陽の光を背に、真っ

白な鷲が円を描きながら、水晶山の火口へ降りてきた。

ドウイータが愕然とした表情になった。口を開いたが言葉が出てこない様子だった。

「話せば長い物語だ」

私は言った。

白鷲ヴァムレイは、音もなく岩だらけの地面に降り立った。

まず最初に、トレアンダが慣れた動作でヴァムレイの背中に飛び乗った。

「大丈夫だよ、お姉ちゃん！ さ、こっちへ！」

トレアンダの姉も、おそろおそろ、トレアンダの後ろにまたがった。続いて、ワド

ワクスの手を借りて、ドウイータが白鷲に乗った。

「なんてこと……。大蛇の次は大鷲なんて……。信じられない」

ドウイータがあえぐように言った。

「世界はまだ謎に満ちているんだよ」

ワドワクスが微笑みながら、ヴァムレイの背中に乗った。

出し抜けに、激しく山全体が揺れた。巨大な岩の塊が、頭上から落ちてきた。それ

は鏡のように磨かれた祭壇を打ち砕いた。祭壇は、一瞬で石くれと化した。

崩壊が始まっていた。岩壁から岩が次々にはがれ、落下してくる。ふと気づくと、地面自体が割れ始めて、冥府の生き物のようにあちこちへ向かって亀裂が走り始めた。

「さあ、ヴァムレイ！ フソリテスの塔へ行つてくれ！」

私はヴァムレイに向かって怒鳴った。

また一度、激しく水晶山が揺れた。私とヴァムレイの間に、巨大な地割れが走った。

「ゴルカンさん！ あなたは……！」

ワドワクスが叫んだ。

「飛ぶんだ、ヴァムレイ！ フソリテスの塔へ！」

ヴァムレイが私のほうへ首を向けた。私があなずくと、ヴァムレイは羽ばたきを始めた。激しい砂煙が上がった。

「駄目！ ゴルカン！」

ドウイータが悲鳴のような声を上げた。

ヴァムレイが、羽ばたいた。

ドウイータとワドワクスの叫びが聞こえたが、すぐに岩の崩壊する轟音にかき消された。

私は、飛び立つヴァムレイに向かって手を振った。

ヴァムレイは、リヴァーシとは反対の南の空に向かい——姿を消した。

地割れがあちこちに走り、岩壁からは無数の岩が落ちてくる。

私は、横たわったフソリテスの遺体に近づいた。懐を探る。血染めの地図はすぐに見つかった。

この場所は、「くちなわの神殿」と書かれていた。地図をよく見ると、どうやら西のほうへ向かって、小径が延びているのがわかった。フソリテスたちが捕まったのは、こちらの道らしい。その小径は「黄昏の回廊」と呼ばれ、途中で二股に分かれる。南西に延びる小径が、水晶山の山腹につながっていた。ほかに、外に通ずる道は描かれていない。

問題は、その道までたどりつけるかどうか。たどりつけたとしても、そこにはアグロウや傭い兵の生き残りが待っているのではないか。

岩に押しつぶされるか、八つ裂きにされるか。

どちらも似たようなものだ。さしたる違いはない。

私は剣を取り、地図を懐に押し込むと、「黄昏の回廊」に向かって走り出した。

次から次へと岩が落ちてくる。さらに足元には無数の亀裂が走った。「黄昏の回廊」に飛び込んだときには、背後で一気に土砂が崩れ落ちてきた。つい一瞬前に私が通った火口からの出口をふさいだ。またしても、退路を断たれた。前進しか、私には許されないようだ。ヒカリゴケも岩とともに落ちてしまい、辺りはほとんど闇に包まれていた。

回廊もまた、無事ではなかった。次々に縦横に亀裂が走り、大小の岩が降ってくる。

と、不意に眼の前に、ぼうつと影が浮かんだ。大きな影だ。

兵の生き残り——私は剣を上段に構えた。突進した。

「待った待った待った待った！」

叫び声が聞こえた。

声の主は、ネストンだった。大きく見えた影は、純白のカケトカゲだった。間違はなく、フィンクだ。フィンクの背中の鞍には、イサーダがしがみつくようにまたがっている。

「あんだ、無事だったんだね。やった！これで助かる！」

ネストンが、喜びのあまり飛び跳ねた。やはり、大人びて見えても、まだ子どもだ。

「どこへ行くつもりなんだ？」

「ぐらぐらつと来て、天井が降ってきたから、無我夢中で走ったんだ。そしたら、このカケトカゲに出くわしたんだよ。意外に従順だったから、イサーダを乗せて走ってきたんだよ。もう、どこをどう走ってきたのかなんて、わかりっこない」

「フィンクだ」

「えっ？」

「そのカケトカゲの名だよ。さあ、手綱を」

私は手綱を受け取り、ネストンを鞍に乗せた。その後ろに私もまたがった。

拍車を掛けた。

フィンクは一度いななき、走り出した。

道の分岐点は、意外にもすぐ近くだった。南西の道へフィンクを導いた。

背後では次々に岩が転げ落ち、地割れが広がり、地鳴りは大きくなるいつぼうだった。

「光だ！」

ネストンが前方を指さした。

その光が、徐々に大きくなっていった。

唐突に、私たちは陽光の下に飛び出した。

「ひやつほおおうっ！」

ネストンが歓声を上げた。そのとき、はじめてイサーダがこちらを振り返った。微笑んでいる——はじめて見る、イサーダの笑みだった。

水晶山の斜面には、短い草が生い茂っていた。暗い回廊を走っている間に、頂上から中腹付近まで下っていたようだ。しかし油断はできない。足元では、未だに地鳴りが続いている。背後から、大小の岩が次々に転がってきた。私はできるだけ勾配の緩やかなところを選んで、カケトカゲを走らせた。

何イコル走ったか、定かでない。振り返ることもなく、四半刻ほどフィンクを駆っていただろうか。いつしか、私たちは平坦な土地に到達していた。私はフィンクを止めた。

「ねえ、後ろ見て！」

ネストンが叫んだ。私は背後を振り向いた。

水晶山が、崩壊しつづあった。

山頂付近が、まるで内部へめり込むように、崩れていく。暗灰色の煙が、猛烈な勢いで天空に向かって上がっていった。ちょうど、蛇の息で石と化した者たちと同じ色だった。最後までマトスの妄言を信じた者たちの煙——彼らの行き着く先は、どこなのか。

崩壊は、長いように思われたが、短いあいだの出来事だったのかも知れない。いつの間にか、水晶山は今までの三分の二ほどの高さになっていた。

この地上界でもっとも美しい山——その姿は片鱗も残っていないなかった。いびつな巨大な岩の塊に過ぎなかった。

いつしか、地響きが止まっていた。静寂が戻っている——崩壊は、終わった。

「助かった……のかな？」

放心したように、ネストンは言った。

「そうだ、助かったんだ。命を失った人たちも多いが、少なくとも、きみとイサーダは生きている。これからも生き続けるために、神様が——ヘクロンなのか、ほかの神なのかかわからないが——きみたちに命を与えてくれたんだろう。」

イサーダが、口を開きかけた。

「あ……」

私はそつと、彼女の口元に耳を寄せた。

「あ、ありがとう……」

おどおどとした幼い声が聞こえた。私はイサーダに微笑み返した。

私は、フィンクに拍車を掛けた。フィンクは声高くないなき、草原を駆け始めた。

半ば気を失いかけながらも手綱を執り、ネストンとイサーダを連れ、フソリテスの塔に到着したのは、日没近くになってからだつた。

真つ先に私たちを発見したのは、フィエルだつた。彼女がフィンクに向かって駆け出してくるのが見えた。それからの意識は朦朧として、視界が暗くなつた。

目覚めると、私は天幕の寝台に寝かされていた。眼の前には、フィエルがいた。

「ゴルカンさん！ 気がつかれましたか？」

「フィエル……。すまない、きみにはほんとうに心配をかけた。けれど、フィンクには傷一つ付けてない。約束は守つたよ」

私が言うと、彼女は少しだけ微笑んだ。

「面会したいっていう人がいるんです。ほんとは断らないといけないんだけど……たぶん、ゴルカンさんには大切な人なんですよね」

そう言い残し、フィエルは天幕からそそくさと駆け出して行つた。

入れ替わりに入つてきたのは、ドウィータだつた。

「ゴルカン……」

「ワドワクスは無事か？」

私は尋ねた。

「第一声がそれなの？」

私は答えを返すことができなかつた。

ドウィータから、ワドワクス、トレアンダ、トレアンダの姉、そして、ムーレグも無事に塔に戻っていることを聞かされた。しかし、〈ヘクロノムの騎士団〉の生き残りには、わずかに三名だけだつた。白鷲ヴァムレイは務めを果たすと、すぐにいざこと知れぬ大空へ飛び去つて行つたという。

しばし、私たちの間に、沈黙が落ちた。

それを先に破ったのは、ドウィータだった。

「これから、西に帰るの？」

私がかぶりを振った。

「いや、まだ解決していないことがある」

「そう……そうね……」

ドウィータはうなずいた。

二日間、私は天幕で過ごした。そのあいだに体は、充分とは言えないにしても、かなり回復することができた。

ネストンとトレアンダ、そしてイサーダは、フソリテスの塔で暮らすこととなった。残念なことに、彼らの両親は、見つからなかった。すでにマトスの傭い兵たちに殺されてしまったのか、あるいは水晶山崩壊に巻き込まれてしまったのか。

ムーレグは、いつそう遅しくなったように見えた。兄と父を相次いで失った悲しみを微塵も見せず、胸を張って私に言った。

「任せて下さい。子どもたちを苦しめることは、二度とさせませんから」

フィエルは、故郷であるサンナ村に帰ることになった。一人で帰すのは不安だったが、

「フィンクが守ってくれるから大丈夫。ゴルカンさんも早く帰って来てね」

と彼女は笑いながら言った。彼女が西の国へ旅立つとき、フドーニは人目もはばからずに声を上げて泣いた。ムーレグの双眸にも涙が浮かんでいた。

私には、まだやり残したことがあった。

翌日の夜明けとともに、私とワドワクス、そしてドウィータはフソリテスの塔をあとにした。

「困ります。お引き取りを！」

私たちはオーアが引き留めるのも聞かず、屋敷を通り抜け、菓草園へと向かった。ここに来る理由を私から聞かされていなかったワドワクスとドウィータは、戸惑い

ながらも、強引な私のあとについてきた。

「どうか、もう帰って下さい！ 困ります！ これ以上わたしたちにつきまとうのはおやめ下さい！」

オーアは懇願するように言った。

「これが最後です」

私が言うと、オーアの顔が一気に青ざめた。

薬草園は、前回来たときと同様、独特の刺激的な匂いに満たされていた。

私、ワドワクス、ドウィータの三人は、小径を通って薬草園の奥へと進んだ。

彼女は、前回と同様、そこにいた。車輪の付いた椅子に座り、深い緑色の薬草の茎から丁寧に棘を一つ一つ取っている。

「また、お目に掛かります」

私が言うと、オーアの母——ジェクとノアの祖母は、椅子ごとこちらを向いた。

「何用ですか？ 衛士を呼びますぞ」

「すでに、呼んであります」

私は静かに言った。ワドワクスとドウィータが、怪訝そうに顔を見合わせた。

「何と……？」

老婆の顔がゆがんだ。

ドウィータが一步前へ進み出た。

「はじめてお目に掛かります。わたしは、まなびや学舎でジェク君を教えていた教師で、ドウ

イータと申します」

「ふん、〈汚穢おわいの者〉がどんな知恵を得られるというのかね」

老婆は吐き出すように言った。

私は言った。

「私がここに来た理由を、あなたはご存じのはずだ」

老婆は答えなかった。私は続けた。

「セネクさんにもお会いしました。あなた方の言う〈汚穢の者〉である方に。ジェク君がもつとも慕っていた方に。ご存じかどうかわかりませんが、セネクさんは亡くなられました。殺されたのです」

老婆は表情を変えなかった。車輪付きの椅子を、きりきりきり、と音を立てて移動させ、黒い花卉の付いた灌木へ近づいた。その漆黒の花弁を見上げると、花をちぎり始めた。

「もうやめましょう」

私は言った。

老婆は手を止めた。その背中に向かって、私は言った。

「私は、ある友人からリリローの花を干した薬草をもらいました。それは、血止めの薬になります。青いその花びらは、私の傷から血を吸って、漆黒に染まりました」

老婆は動かなかった。私はさらに続けた。

「あなたは、西方の馬鹿げたまじないだとおっしゃる。しかし、その馬鹿げた酔っぱらいのまじない師は、面白いことに、蛇神へクロンの手下であった大蛇の名を言い当てたのです。あながち、でたらめだとも言い切れないでしょう」

相変わらず、老婆に反応はなかった。いつの間にか、薬草園の隅にオーアが来ているのに気づいた。所在なげに、手の指をもてあそんでいる。

「不思議なことに、その酔っぱらいのまじない師が言ったのです。『リリロー、若き血を吸って、闇の色に染まる』と。その木はリリローですね」

老婆は動かなかった。しかし、オーアは、息を呑み、両手で胸を押さえた。

「ゴルカンさん……?」

ワドワクスが、眉間に皺を寄せた。それには答えず、私は言った。

「リリローは、その両側の木のように、もともと青い七枚の花弁をつけるはず。それは、ここにいるワドワクスとドゥイータならよく知っています。そうだろうか?」

いきなり質問を振られ、二人は戸惑っていた。が、ドゥイータはうなずいた。

「中央の木——そのように黒いリリローの花は、この地上には存在しない。たった一つの場合を除いて」

「やめて下さい!」

叫んだのは、オーアだった。残酷なことだとはわかっていた。しかし、私はその先を続けたいわけにいかなかった。

「漆黒の——闇の色のリリローの花が咲くのは、その花が——血を吸ったとき」

「ゴルカン、なんてことを……!」

ドゥイータが悲鳴に似た声を上げた。

私はゆつくりと、黒い花を付けたリリローの灌木に歩み寄り、しゃがんだ。そして、その根元の土を手で掘り始めた。

「やめろ！ やめるのだ！」

老婆が叫んだ。しかし、車輪付き椅子に腰掛けた彼女には、止めることができなかった。

私は土を掘り続けた。不意に、その手を捕まれた。オーアだった。

「やめて下さい！ お願いです！」

その顔は涙で濡れていた。

「もう、逃げ隠れは無理です。もうすぐ、衛士隊も来ます」

私はオーアの手を振り払った。彼女は、力尽きたように地面にくずおれた。

私はさらに土を掘った。いくらか掘らないうちに、何かが指先に触れた。

眼を閉じた。

見たくなかった。

これ以上、掘ることをやめたかった。しかし、それはできなかった。掘り進めた。

地中から現れたのは、小さな人の手だった——子どもの手。腐敗が進み、半分は骨と化している。華奢な五本の指が、宙を掴んでいた——まるで苦悶しているかのよう

に。

「ああああああ……」

オーアが声を上げた。

私はそれを無視し、立ち上がった。そして、老婆に向かって言った。

「あなたは、ジエク君が呪技遣いじゆぎつかになろうとしていることを知っていた。ジエク君は、導術師の家のなかの男子。女子だけが術を継承できる導術師の家のなかで、彼だけは疎まれた——ちやうどセネクさんのように。ジエク君だって、一人の子どものものです。親の愛情を求めるのは当然です。しかし、導家ではそれが許されない。ジエク君は、

この家では不要な存在だった。あなた方の言う〈汚穢おわいの者〉だった。そこで、彼は呪技を身に着けようとした。あなた方の言葉を借りるならば、『転ぶ』ことを選んだ。

しかし、喜んで彼がそうしたとお思いですか？ 親の愛を受け取ることもできず、穢けが

れた存在として疎まれ、遠ざけられる。そんな彼が呪技に魅入られても、誰が責めることができるでしょう?」

誰も、一言も発しなかった。

思えば、マトスもまた、フソリテス家の中で〈聖蛇師〉を継承できない「不要な」存在として生まれ、育った。マトスはその憤りを邪な力に変え、地上を支配しようとした。

「ジェク君の不幸は、それだけではなかった。彼は、呪技だけでなく、もつと恐ろしいものに魅入られることになった。蛇神ヘクロンの使者である大蛇です。まったく偶然に、彼はこの近所に大蛇を封印した祠があることを知った。彼がその祠を知ったとき、どんな思いだったか、私には想像が付きません。自分にも力を持つてることを家族に認めて欲しかったのではないのか。母親に、お祖母さんに認めて欲しかったのではないか——勝手な想像に過ぎませんが、そんな気がします。いえ、そうであつて欲しいと思います」

私はそこで一度言葉を切った。

「彼は、ただ単に欲しかったんでしょう。親の、家族の愛というものが。しかし——」

「ゴルカン、もしかして……?」

ドウィータが言いかけた。ほぼ同時に、ジェクの母親、オーアが、地面に泣き崩れた。

これ以上言うべきなのか、迷いを覚えた。私が話しても、誰も幸福にならない。ならば沈黙を守ったまま、この場を去つてサンナ村の小屋に戻るべきなのではないか。一角犬グンと一緒に、誰の人生にもかかわらず、誰からも相手にされず、ただ静かに時が過ぎて老いていくのを待つべきではないか。それが私のこの四年間の生き方ではなかったのか。

しかし、私は自らを裏切った。先を続けた。

「あなたがたは、ジェク君の気持ちを知ろうとしなかった。ジェク君は、あなたがた導師の家にとつて、危険で邪魔な存在以外の何者でもなかったのです。だから——」

私は老婆をにらみつけた。ようやく、老婆は顔を上げて私を見た。もはやその双眸には、導師としての力強い光は一片も見られなかった。

「あなたがたは、ジェク君を殺した。その方法は、わかりません。衛士隊の監察方が、すぐに解明してくれるでしょう。そして、ここにジェク君の遺体を埋めた。それです

べてを終わらせることができるとお思いだったかも知れないが、大きな間違いだった。これは、リリローだったのです。血を吸うと漆黒の闇の色の花卉を付ける、リリローの木だった」

「いやあああああああ！」

絹を引き裂くような悲鳴が響き渡った。振り返った。いつの間にか、ジェクの姉のノーアが、母屋から駆け出していた。彼女にだけは、この話を聞かせたくなかった。

「嘘！ 絶対に、嘘！」

ノーアの手元で何かが陽光を反射して光った。次の瞬間、彼女は駆け出した。様々なことが、一瞬のうちに起こった。

私は剣の柄を手で握った――

ドウィータは母親のオーアに駆け寄った――

ワドワクスは、ノーアに向かって立ちふさがった――

ノーアはワドワクスの体につかつた――二人の体がつれ合い、倒れ込んだ――そして――静寂。

「いやあああああああ……」

悲壮な絶叫が薬草園に響き渡った。

ノーアの手握られているのは、料理用の包丁だった。それは、真っ赤に染まっていた。

「ワドワクス！ ワドワクス！」

ドウィータが叫んだ。ノーアの前でワドワクスは倒れたまま、微動だにしなかった。私も走り出した。包丁を手にしたノーアに向かった。

同時に、母屋のほうから慌ただしい足音がなだれ込んできた。七、八人の衛士隊だった。先頭には、ベリーグの姿があった。

「いやあああああああ……」

今度のノーアの悲鳴は、かすれ切っていた。天を仰ぎ、大きく口を開き、すべての哀しみと絶望を吐き出そうとするかのような、痛々しい顔だった。

「ノーア！ 許して！ お母さんたちを許してえええ……！」

娘に向かって走り出そうとするオーアを、数名の衛士が押さえつけた。それを見た娘のノーアの目つきが変わった。

「ノーア、駄目だ！」

私は叫んだ。跳躍した。手を伸ばした。遅かった。

ノーアは、包丁を自らの喉に深々と突き刺した。

ごぼごぼという音を立て、泡立った血潮が喉から吹き出した。ノーアは、そのまま声を上げることもなく、仰向けに地面に倒れ込んだ。

私はノーアを抱き起こした。手で喉の傷を押しえつけた。しかし、いくら力を入れても、私の非力な指の間からは、止めどなくノーアの鮮血が——命があふれ出た。

ドウィータは、這うようにして、ワドワクスに近づいた。が、彼はすでに身動き一つしなかった。彼女はワドワクスを抱きしめた。

「ワドワクス！　ワドワクス！　眼を開けて！　返事をして！」

ワドワクスの答えはなかった。

私が抱きかかえたノーアの眼からも、光が消えていた。脈もない。瞳孔の開き切った双眸は、灰色の虚空をにらみつけていた。

私はノーアの亡骸をそつと地面に横たえ、眼を閉じてやった。

そのときだった。ケラケラと嗤う甲高い声が響き渡った。老婆だった。

「そうじゃよ、ノーア、山の乳を飲んで、いい子に育つのじゃ、マンテラ神もトライアド神もご覧じゃよ。『みどりの林に蔓が這う。古き里の幼き娘。山鬼どもが来る前に、ムラサキイチゴを摘みましょう……』。綺麗なお歌じゃ、ジンパー神もお妬みなさる——」

心のどこかが壊れてしまったのだろう。老婆はひとしきり歌うと、またケラケラと大声で嗤い始めた。しかし老婆は、三名の衛士によって、取り押さえられた。彼女は抗わなかった。そのまま、葉草園から連行されて行った。

『「あおい夜空の七つの星よ。古き里の幼き娘……」』

車輪付きの椅子を押されて連れ去られるあいだもずっと、老婆は歌い、嗤い続けた——自らの喉を突いて果てた孫娘のために。

そのしわがれた声はいつまでもいつまでも、私の耳にこびりついた。

私は立ち上がった。よろよろと歩き出した。

ドウィータに抱きかかえられたワドワクスに歩み寄った。見下ろした。ワドワクスの青ざめた顔。ドウィータの震える肩。

その脇にひざまずいた。

ワドワクスがすでに息絶えているのは一目瞭然だった。彼の面持ちは、むしろ穏やかと言ってもよかった。何か暖かなものに包まれて眠る童子のようにも見えた。

私は口を開いた。しかし、発するべき言葉は何もなかった。背後から、衛士の声が聞こえた。

「間違いありません。十歳程度の子ども、男の子の遺体です。死後、ひと月ほどでしょう。背中に三カ所、刺し傷らしきものが……」

私は拳を握りしめた。涙は出なかった。それだけ私が冷酷な人だという証だ。不意に、ベリーグの居丈高な野太い声が、背後からぶつけられた。

「ゴルカン、詰め所まで来てもらおう。おまえが何を知っているのか、どうやって知ることが出来たのか、詳細をじっくりと訊かせてもらおう！」

「黙れ！」

怒鳴っていた。

「何だと、貴様……!!」

「おまえには死者を悼む心はないのか？」

気圧されたかのように、ベリーグは後ずさった。が、威厳を取り繕うように、ジェクの遺体が埋められた黒い花卉のリリローの根元へと向かった。

私は唾を飲み込み、そして、ドウィータに言った。

「私は、二度までも、きみの愛する人を奪ってしまった……」
ドウィータの答えはなかった。

立ち上がった。歩き出した。

薬草園から出た。ノアが導術を見せてくれた小屋を通り過ぎた。

石造りの母屋に入った。大鍋のかけられた釜のある薬草の調合室を通り抜けた。玄関を抜けた。

林を突っ切る一本道に出た。

空を見上げた。曇っていた。ちょうど、水晶山の山頂のように。暗灰色の雲が厚く頭上を覆っていた。

私もあのとき、蛇の息を浴びて暗灰色の石と化していればよかったのだろうか。

「あなたは、正しいことをした」

不意に声がした。

背後に立っていたのは、ドウィータだった。

私はかぶりを振った。

「ゴルカン、あなたは生きて。あなたは生きなければならない。生き延びてしまった者は、死んでしまった人の代わりに生き続けなければならないの」

ドウィータは、涙をいっぱいにためた眼で、私をしっかりと見つめて言った。

多くの人が命を落とした——あまりにも多くの咎なき人びとが。

もう一度、空を見上げた。暗く重く灰色の雲を。

「私を——」

顔を下ろした。ドウィータの両眼をまっすぐに見つめ返した。

「一角犬のグンが待っている」

歩き出すと同時に、冷たい雨が降り始めた。

「蛇神覚醒」完